様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４４０１０３５

研究課題名（和文）中国東北における地域構造の変化に関する地理学的調査研究

研究課題名（英文）Geographical research on the change of regional structure in Northeast China

研究代表者
小島　泰雄（KOJIMA, YASUO）

京都大学・人間・環境学研究科（研究院）・教授

研究者番号：８０２３４７６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国東北で進行している地域構造の変化を地理学的な調査に基づいて解明することをめざして、3年間にわたって行われた。フィールド調査は、初年度が長春、2年度が松原、3年度が延吉という、吉林省の異なった性格をもつ３つの地域で行われた。農業と農村は近代的開発としてのフロンティア性を残す一方、都市は資源・生産依存から消費志向へと発展軸を交替させていることなど、本研究は構造変化の多様性を実態的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has been aimed at revealing the change of regionl structure in Northeast China through geographical surveys for three years. Field surveys were carried out in three different area in Jilin province, Changchun in the first year, Songyuan in the second and Yanji in the third year. While the agriculture and rurality remain the character of frontier as modern exploitation, the urban development changed the axis from the dependence on resource and manufacture to the acceleration of consumption. Multiple changes of regional structure were showed by this research.

研究分野：人文地理学

キーワード：地理学　中国東北　フィールド調査　地域構造

１．研究開始当初の背景

中国東北は、19 世紀に開発が本格化した地域であり、その過程に日本が満洲国を通して関与したことから、植民地経営の文脈と人民共和国における国家建設が切り離されて論じられる傾向があった。また後者についても、中国東北は高度経済成長下において先進地域から問題地域へと後退し、「振興東北」政策が実施されるに至っており、歴史的展開と現在的状況にかかわるフィールド調査に基づく、地域構造の変化の解明と新たな東北像の提示とは、地理学の専門領域の中にとどまらず、隣接分野においても、また社会的にも重要な課題となっていた。

２．研究の目的

本研究課題は、中国東北で進行している構造変化を、地域スケールの重層性に着目した地理学的な調査に基づいて、実態的に解明することをめざしたものである。中国東北では、2003 年に始まる「振興東北」政策の下で工業・農業の構造改革と交通・通信の基盤整備が行われており、資源の開発や、都市の発展と相乗的な関係を持ちつつ、地域構造の転換が急速に進んでいる。そのために既存の地域像は陳腐化しており、総合的なフィールド調査を通して地域を捉えなおす必要があった。それは北東アジアの一員である日本で環日本海的な視圏から進められている開発構想にとって、喫緊の課題でもある。本研究課題は、中国地理に熟達した研究者集団が、現地研究者と協力して、学術的課題でありかつ社会的含意をもつ調査研究に取り組んだものである。

３．研究の方法

本研究課題は、中国東北の構造変化を解明するに際して、フィールド調査を主たる方法とした。研究期間である３年間、毎年夏季に中国東北（長春・松原・延吉）において、２週間にわたって、聞き取り調査・景観観察・文献収集からなるフィールド調査を一体となって行った。実施にあたっては５つのグループ（農村班・経済班・都市班・民族班・観光班）を形成して、効率的な活動を進めた。カウンターパートは中国科学院東北地理与農業生態研究所（張柏教授）である。調査で得た知見の共有と公開を進めるために、毎年冬季に中国研究者を招聘して国際ワークショップを開き、さらに最終年度の 9 月には国際シンポジウムを行った。社会への知見の還元の一助として調査報告書をインターネットに公開した。

４．研究成果

(1) まず年度ごとの研究成果を記してゆく。平成 24 年度は、吉林省長春市をフィールドとして、8 月 13 日から 27 日までの 2 週間にわたるフィールド調査を行った。参加者は研究代表者の小島、研究分担者の秋山・小野寺・松村・高橋の 5 名に加えて、連携研究者 2 名（柳井・阿部）、研究協力者 3 名（柴田・石田・金）の総勢 10 名であり、カウンターパートは張柏教授を代表とする中国科学院東北地理与農業生態研究所と東北師範大学の研究者である。フィールド調査は、5 つのグループに分かれて、日中共同で行われた。農村班は長春近郊における農村・農業の変遷についての調査を行い、東北農業の生産主義的展開と自給性の関連や初等教育の様態を明らかにした。都市班は長春市街の景観観察を行い、都市計画と景観変遷の実態を明らかにした。経済班は国有企業及び外資系企業の訪問調査を行い、経済転換の進展を明らかにした。民族班はモスクとムスリムを採訪し、長春におけるイスラームの変遷について明らかにした。観光班は満洲国関係の観光地について調査を行い、都市観光の現状を明らかにした。各研究者はフィールド調査を通して収集した資料をもとに、12 月に京都大学で開催された国際ワークショップにおいてディスカッションを深め、個別の論考を公刊するとともに、3 月に立正大学（熊谷市）で開催された日本地理学会春季学術大会において、研究成果を発表した。さらに調査報告書として『中国東北における地域構造変化の地理学的研究－長春調査報告』を公刊し、インターネット上でひろく公開した。

(2)平成 25 年度は、吉林省松原市をフィールドとして、8 月 15 日から 28 日までの 2 週間にわたるフィールド調査を行った。参加者は研究代表者の小島、研究分担者の秋山・小野寺・松村・高橋の 5 名に加えて、連携研究者 1 名（キム）、研究協力者 2 名（柴田・石田）である。フィールド調査は 6 つのグループに分かれて、日中共同で行われた。農村班は松原近郊における農村・農業の変遷についての調査を行い、水稲生産の歴史的変遷の様態を明らかにした。都市班は双子都市である松原の景観観察を行い、都市構造の変化と都市公園の利用状況を明らかにした。経済班は松原の経済基盤となっている石油企業をめぐって調査を行い、その生産と生活について明らかにした。民族班はモスクとムスリムを採訪し、松原におけるイスラームの状況について明らかにした。観光班はモンゴル族関係の観光地について調査を行い、民族観光の開発過程を明らかにした。教育班は市街地の小学校を訪問し、その分布論的特徴を明らかにした。各研究者はフィールド調査によって収集した資料をもとに、12 月に京都大学で開催された国際ワークショップにおいてディスカッションを行った。さらに調査報告書として『中国東北における地域構造変化の地理学的研究－松原調査報告』を公刊し、インターネット上でひろく公開した。

(3)平成 25 年度は、8 月 9 日から 25 日までの 17 日間にわたって吉林省延吉市とその周辺

においてフィールド調査を行った。参加者は、研究代表者である小島、研究分担者の小野寺・松村・高橋の 3 名、さらに連携研究者 2 名（キム・阿部）、研究協力者 2 名（秋山・石田）であった。フィールド調査は、4 つのグループに分かれて、それぞれ日中共同で行われた。農村班は、延吉周辺の農村において聞き取り調査を行い、朝鮮族の出稼ぎにより農業と農村の流動化が進む様態を明らかにした。都市班は、市街地の景観観察からその形成について考察を行い、辺境と少数民族地域の都市の特性を指摘し、都市住民のレジャー活動を実態的に考察し、また住民組織である社区居民委員会に着目して、その都市社会空間としての充実を明らかにした。経済班は、情報サービス産業の立地展開を検討し、言語を通した韓国経済への包摂状況を明らかにした。文化班は、公園・広場の観察から、レジャー空間に民族性が反映しているとした。9 月 21 日には、富山大学で開催された日本地理学会秋季学術大会において、中国から 2 名の研究者（張柏・魯奇）を招聘してシンポジウム「ポスト満洲としての中国東北－フィールド調査に基づく地域像再考－」を開催し、科研メンバーからは、小島・小野寺・秋山・松村・阿部が発表を行った。3 年間の調査研究活動の総合をめざしたものである。さらに 1 月 11 日から 12 日にかけて、京都大学で延吉調査のワークショップを開催した。

(4)本研究課題を通して、中国東北についていかなる地域像が提示されたであろうか。地域像は本来、複合的に構成されるものであるが、いくつかの要点にまとめることは許されるであろう。中国東北は清朝の封禁が解かれてのち、近代に開発が進んだ地域である。満洲期はその一つの過程に位置づけられるが、その後の社会主義的開発や構造調整、高度経済成長を経験した現在の都市化や工業化、農業開発について、満洲期の貢献を過大に評価することはできない。1 億を超える人口を有するに至った中国東北は、土地や資源に恵まれたフロンティア的性格を残しており、なお潜在力を持った地域とみなすことができよう。

(5)本研究課題は、個別の論文と学会発表によって、ひろく地理学において認知されるにいたっており、とくに最終年度に日本地理学会大会において開催した国際シンポジウムでは、多くの聴衆を得て、活発な議論が展開された。歴史学や経済学といった隣接分野との交流も地域研究をアリーナとして進んでおり、学生や一般社会への還元も多様な形態で展開されている。また調査の過程において、日本と中国の研究者が協同し、学術交流と相互理解が深まったことは、本研究課題から派生した成果の一つと言えよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１１件）

小島泰雄「中国山西における農村集落の大規模性について」地域と環境、査読無、12 号、2012 年、89-94 頁。
小島泰雄「トウモロコシとカン」人環フォーラム、査読無、32 号、2013 年、22-25 頁。
小野寺淳「中国の地理学」地学雑誌、査読有、121 巻 5 号、2012 年、824-840 頁。
阿部康久「中国大連市に進出した日本語コールセンターの存続状況」地理科学、査読有、67 巻 2 号、2012 年、51-67 頁。
柴田陽一「満鉄調査部における地理学者の思想的展開」空間・社会・地理思想、査読無、16 号、2013 年、29-45 頁。
孫艶・阿部康久「地方都市における中国人元留学生の就業状況と継続意志－福岡県を事例として」華僑華人研究、査読有、10 号、2013 年、5-21 頁。
阿部康久・金紅梅「日系電子部品メーカーにみる製品特性の差異と現地化－上海のＡ社販売子会社を事例に」地理学評論、査読有、87 巻 3 号、2014 年、248-266 頁。
小島泰雄「前郭灌区の水田開発」地域と環境、査読無、13 号、2014 年、1-14 頁。
阿部康久・徐亜文「中国山東省済南市における大学生の就職活動の情報化と省外就職への制約」都市地理学、査読有、10 号、2015 年、78-88 頁。
高橋健太郎「学界展望　文化地理」人文地理、査読有、66 巻 3 号、2014 年、56-58 頁。
柴田陽一「満洲に対する日韓研究者のまなざし」東方、査読無、40 巻、2014 年、2-8 頁。

〔学会発表〕（計２２件）

小島泰雄「大豆コウリャンからトウモロコシへ」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
柴田陽一「小中学校の立地変化からみる中国農村地域」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
秋山元秀「都市計画と都市景観の形成」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
小野寺淳「中国におけるグローバル化の中の都市再編」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
柳井雅也・阿部康久・小野寺淳「中国長春市における日系自動車企業の立地展開」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
高橋健太郎「長春市における回族地域社会の持続と変容」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。

石田曜「南湖公園における休閑活動とその特性」日本地理学会 2013 年春季学術大会、2013 年 3 月 29 日、立正大学熊谷キャンパス（埼玉県）。
小島泰雄「Continuities and discontinuities of spatial organization in rural China」IGU Kyoto regional conference 2013、2013 年 8 月 7 日、京都国際会議場（京都府）。
小野寺淳「中国における資源開発と都市形成－吉林油田を事例に」日本地理学会 2014 年春季学術大会、2014 年 3 月 27 日、国士舘大学（東京都）。
阿部康久・孫艶「The employment situation for Chinese foreign students in local cities and their will to continue working: a case study of Fukuoka prefecture」The 8th Japan-Korea-China joint conference on geography、2014 年 8 月 2 日、九州大学（福岡県）
金紅梅・阿部康久「日系電子部品メーカーにみる製品特性の差異と現地化－上海のＡ社販売子会社を事例に」経済地理学会西南支部例会、2013 年 6 月 22 日、九州大学（福岡県）。
柴田陽一「『二〇世紀満洲歴史事典』の「環境」関連項目について」『二〇世紀満洲歴史韓日合同書評国際会議（招待講演）、2014 年 3 月 14 日、東亜大学校（韓国、釜山特別市）。
柴田陽一「吉林省松原市中心部における都市化の進展と小学校通学区域の変化」日本地理学会 2014 年春季学術大会、2014 年 3 月 27 日、国士舘大学（東京）。
石田曜「Characteristics of “xiuxian” activities in China: the case study of Nanhu park」IGU Kyoto regional conference 2013、2013 年 8 月 8 日、京都国際会議場（京都府）
小島泰雄「いま日本で中国東北を考えること」日本地理学会 2014 年秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県）。
小野寺淳「中国東北地区における地域開発の変遷」日本地理学会 2014 年秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県）。
松村嘉久「長春における満州国時代の観光資源をめぐって」日本地理学会 2014 年秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県）。
秋山元秀「新京から長春へ」日本地理学会 2014 年秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県）。
阿部康久「日系企業の進出と要因」日本地理学会 2014 年秋季学術大会、2014 年 9 月 21 日、富山大学（富山県）。
小野寺淳「地域開発と自然環境の相互作用」現代中国・内モンゴルにおける地域環境変動のダイナミズム（招待講演）、2014 年 11 月 11 日、札幌学院大学（北海道）。
柴田陽一「中国における教育の公平性をめぐって」現代中国文化の深層構造、2014 年 6 月 13 日、京都大学（京都府）。
石田曜「中国の都市公園・広場にみるレジャー空間の特性」2014 年度人文地理学会大会、2014 年 11 月 9 日、広島大学（広島県）。

〔図書〕（計５件）
小島泰雄編、京都大学人間・環境学研究科地域空間論分野『中国東北における地域構造変化の地理学的研究－長春調査報告』、2013 年、67 頁。
小野寺淳他、法律文化社『グローバル協力論入門－地球政治経済論からの接近』2013 年、210 頁。
小島泰雄編、京都大学地域空間論分野『中国東北における地域構造変化の地理学的研究－松原調査報告』、2015 年、98 頁。
松村嘉久他、ミネルヴァ書房『よくわかる都市地理学』、2014 年、213 頁。
小野寺淳他『現代中国・内モンゴルにおける地域環境変動のダイナミズム』、2015 年、125 頁。

〔その他〕
ホームページ等
http://hdl.handle.net/2433/179530
http://hdl.handle.net/2433/197306

６．研究組織
(1)研究代表者
小島 泰雄（KOJIMA Yasuo）
京都大学・人間･環境学研究科・教授
研究者番号：80234764

(2)研究分担者
秋山 元秀（AKIYAMA Motohide）
滋賀大学・教育学部・教授
研究者番号：00027559
（平成 25 年度まで）

小野寺 淳（ONODERA Jun）
横浜市立大学・国際総合科学部・教授
研究者番号： 50292206

松村 嘉久（MATSUMURA Yoshihisa）
阪南大学・国際観光学部・教授
研究者番号：80351675

高橋 健太郎（TAKAHASHI Kentaro）
駒澤大学・文学部・教授
研究者番号：30339618

(3)連携研究者
柳井 雅也（YANAI Masaya）
東北学院大学・教養学部・教授
研究者番号：00200572

小方 登（OGATA Noboru）
京都大学・人間･環境学研究科・教授
研究者番号：30160740

金 どぅ哲（KIM Doo-chul）
岡山大学・環境学研究科・教授
研究者番号：10281974

阿部 康久（ABE Yasuhisa）
九州大学・比較社会文化研究科・准教授
研究者番号：10362302

(4)研究協力者

柴田 陽一（SHIBATA Youichi）
京都大学・人文科学研究所・研究員

石田 曜（ISHIDA Yo）
京都大学・人間･環境学研究科・大学院生